

二次元ぶち文庫

ロリポップ
ニツケ

4
4

よんぶんのよん

平夜 諷

表紙イラスト：豆腐

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ロリ・パニック4/ 4』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ロリ
パ
ニ
ツ
ケ

4
4

よんぶん
の
よん

千夜 詠
表紙 / 豆腐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

かるさかゆうじ
軽坂悠二

両親の海外勤務に伴って、憧れの義姉の元に身を寄せることになった少年。

にしかのうあやの
西加納彩乃

悠二の、亡くなった兄の嫁だったお姉さん。幾つもの特許を持つ科学者で、今回は若返りの薬を発明するが……!?

桜の散りだした並木道は、この季節としては充分に暖かかった。真つ青に広がる快晴。緩やかな清流の煌めきに、新しい生命の息吹を感じる。何かが始まる。そんな予感をうきうきと感じさせてくれる春だった。この土手の向こうにある坂を下りれば、田舎びたこの辺りでも一際大きな一軒家があるはずだ。軽坂悠二は、そわそわとした逸る気持ちをゆつたりとした足取りで抑えながら歩みを進めていた。

両親の海外勤務を教えられたのは僅か三日前。それから慌ただしく準備し、日本に残る悠二の新しい生活の場所が決まったのは実に昨日のことだった。親から知らされたその時に覚えた嬉しさと困惑した複雑な気持ちは今も続いている。確かにここなら転校する必要もなく、むしろ今までよりも通学時間は短くて済む。ただ引き取り手が、彼にとつては喜ばしいことなのだが、世間的には問題ないのだろうか。

「ここ、だったな……。義姉さん、元気かな……」

古いヨーロッパの田園を思わせるようなひなびた風景の中に、ぽつんと一軒建っている木造住宅だった。ペンキで真っ白に塗られた壁とバルコニーは、コテージと言った方が似つかわしい。知らない人から見れば別荘のようだったろうし、住んでいる人間も確かにお金持ちには違いない。

よく見ればあまり手入れの行き届いていない欧風の庭を越えて、悠二は玄関の前に立った。実に五年ぶりだ。再会を前にして、ただ鼓動は高鳴った。ドアをノックしようとして、

思い直して鞆一つだけの荷物から鏡を取り出す。髪は乱れていないか？ 目ヤニはついていないか？ まさか鼻毛なんて伸びていないよな。すっかり成長した自分の姿に、あの女性はどうな反応をしてくれるのだろうか。

「よ、よし……っ！」

立ち上がって、キリリと凜々しい男の顔を作ってみる。再びドアをノックしかけたその時、ボタン、勝手に開いた。

「あつ……」

本気で驚いた時の自分の顔がどんなものかなんて見たことないが、きつと笑えたことだろう。目の前の女性がそれを証明してくれた。

「ぷっ、ははっ、はは……、やだ凄いタイミング。おねえさん、びっくりだよ……ぷぷ……っ」

箸が転がっても笑える歳でもないだろうに、その女性はまさに腹を抱えている。

「な、何がそんなに可笑しいんだよ！」

想定していた再会の甘酸っぱい挨拶もなしに、五年前の本当の姉弟のような関係に一気に戻っていた。

「ご、ごめ……ん、ぷっ、はは……」

この壺にはまっている人こそ、一年間自分の面倒を見てくれる西加納彩乃さんだ。西加

にしかのうあやの

納という旧姓に戻って五年。その前は軽坂を名乗っている。彼女は兄の嫁さんだった人だ。寝起きのようなボサボサに乱れた長い黒髪を揺らし、頬引き攣らせながら瞳を細めている。眉も書ききっていないノーメイクで、自分とのスタンスの違いに愕然としそうになった。

だが、

(変わっていないな……義姉さんは……)

五年という歳月を感じさせないくらい、若々しさを保った彼女は、前述の通りの有様ながら、美人という形容からまったたく外れることがない。むしろこの無防備な笑顔こそ、高等部在籍の少年が三十路を過ぎた女性に対して思うには些か生意気ではあるが、義姉の可愛らしさを強調しているともいえた。手入れを怠ったヘアも着飾らない清潔感といった印象さえ与え、造っていない素の表情は未だに可憐な少女のようにも見える。もう怒るのも忘れて完全に彼女に見入ってしまった。

そうなると、視線はつい余計なところへと向いてしまうものだ。だぶだぶのタンクトップの胸元から覗けてしまう、ぷるんと柔らかそうに揺れる巨乳の白い上肌。熟した肉果実といったその谷間の陰影に悩殺されそうになって、顔を赤くしながら視線を下げると、今度は、短パンから伸びた大人の脂肪の乗った太股が瞳に飛び込んできた。ドキンと鼓動が跳ねたような気がした。

「ね、義姉さん、そんなに笑っていると、皺が増えるよ！」

カーと顔が熱くなった瞬間、思わず言ってしまった。途端にあれほど笑い転げていた彼女が停止する。どんよりとした負のオーラを放ち、

「そ、そうだよね……」

こちらに顔を向けることなく背を向けた。そういえば昔から歳のことは気にしていたと思う。当時はまだからかい半分の冗談で通用したが、どうやらこの五年で拍車がかかったようだ。

（そんなこと、全然気にする必要なんてないのに……。幾つになつたつて、義姉さんは、ずっと綺麗だ）

面と向かつてそう言えないのが悲しい。

「こら、何してんの？ 早く上がって」

不意に振り返った義姉は、もう既に笑顔を見せている。立ち直りも早い。それもまた彩乃の魅力の一つだ。いつも前向きで明るい女性。この人の心底暗く沈んだ表情を見たのは、兄が死んだ後の数ヶ月間だけだ。その後は、今日まで会っていなかったので分からないが、彼女には笑顔の方が絶対似合っているのだ。

「もう、ぐずぐずするな。きびきび行動！」

「わ、分かってるよ！」

昔のように子供扱いされていることに不満を感じながら、悠二は靴を脱いだ。

二階の東角に悠二の部屋は用意されていた。他にも空いている部屋は五つほどあって、傍から見たよりも家はずっと大きいようだ。屋根裏部屋に地下室もあって、それぞれ物置と研究施設になっている。彩乃は幾つもの特許を持つ科学者であり、化学者である。大学院生の時代から不老の研究に取り組んできた彼女は、副作用の少ないヒト成長ホルモン剤の開発やDHEA（全てのステロイドの母と呼ばれ、体内に最も多く見られる）からの新薬も作り出してきた。大学の研究室を出てからは、金払いのいい海外の製薬会社と契約し、それゆえ、年間数億の収入があるセレブな人であるが、今日一日見た限りでは、そんな優雅さは微塵もない。

「悠ちゃんも、お風呂入りなよ」

夕食後、片付けを命じられた悠二は、義姉の唇がつけられた箸と食器を半ば惚けて見詰めているその最中だった。

「あ、ああ……」

ビクッと体を硬直させて振り返ると、湯上りの彩乃がほんのりと頬染めた逆上（のぼ）せ顔でこちらを見ている。タオルで拭いただけの長い黒髪はまだしっとり艶光沢して、僅かな癖で毛先が曲がっていた。夕食の際に少しお酒を入れたせいもあってか、大きな瞳を半分伏せたような状態でとろんと瞼が落ちていいる。着替えはしたのだろうが、やはり夕

ンクトップで、露出した肩や腋の下、そして急勾配に隆起した胸元から、肌とボディーツプの甘い女の匂いが濃厚に散布されていた。薄暗かったが、近付いてくる彼女の柔らかそうな肉線が、艶かしく震えているのがはつきり分かる。

（義姉さん……ノ、ノーブラ!?!）

一際大きく揺れている乳房の頂が確かにプツクリと膨らんでいた。急速に血流が下半身に集まりだして、違和感が膨れ上がっていく。

「じゃ、じゃあ、風呂入るよ」

とにかくこのままでは色々と危険なので、少年は早歩きでキッチンを後にした。脇に逸れることなく一目散に浴場に飛び込み、高鳴る鼓動を落ち着かせようと躍起になったが、そこには更なる刺激物が待っていた。

「うわあ、あ……っ!」

彩乃が先程まで身に付けていたものが無造作に脱衣場に散らばっている。それはここで彼女が全裸になった証。この向こうには熟した大人の肢体を浸した湯船があり、その残り湯は義姉の肉体の奥から滲み出たものさえ混ざっているのだ。

ブルンと赤ら顔を振った。

「な、何考えてんだよ。だ、だいたい義姉さんも、脱いだものくらい、ちゃんと籠に入れて……」

そして見つけてしまった。少年にとって最も危険な物体。ふらふらと誘われるままに、手にとってしまった。

「こ、これ……義姉さんの、さっきまで穿いていた、ショーツ……」

淡いピンク色の小さな薄布は、まだ下腹部の体温が残っていた。この場所の湿気のせい
か、しっとりとした重みを感じて、中心の秘部に当たる部分は特に生々しく匂いちち、ほ
んのりとまだ女性自身の形状が残っているようにも見えた。摘み持つ両手の指先が興奮に
震え、ズボンの中で肉棒が痛いほど硬直していく。

濃厚に牝が香る。憑依されたように顔に近付けて、

「だ、ダメだ！ こ、こんなの変態じゃないか」

ドキドキと鼓動が鳴った。指先で触れた部分が、義姉の幻影を消してしまうような気が
して、それ以上侵食するのを恐れた。だが、つい先程まで彼女の陰部に接触していた中心
部を見詰めていると、まだ脱衣所にいるのに逆上させたような状態になって、頭がクラクラ
してくるのだ。

（ああ、義姉さんを感じたい……）

下着は顔の正面から離れていかない。それどころかもつと鼻先に近付いて、ピンクの柔
らかな布地が覆っていく。

「ああ、ね、義姉さん……。義姉さんの、匂い……」

浴室の扉が完全に閉まっていないことに気付かぬまま、少年は染み込んでいた秘粘膜の香に陶醉していった。

初めて夢精した時に見たのは義姉さんだっと思ったと思う。あの頃はようやくやく下の毛が生えそろったぐらいで、女性の、あの部分[〃]がどんな形状をしているのかさえ知らなかった。だからその夢の中の、兄に紹介されたばかりのそのとても綺麗な女の人は衣服を着ていて、俺は彼女の桃色に潤った唇を見詰めて、あの部分[〃]を想像していた。

——悠ちゃん——

その女性の顔が間近に接近すると俺の股間は急速に硬直して、奥からドロドロとしたものが込み上げてきた。濡れた唇だけをじっと見詰めてしまつて、そして不意に、

「悠ちゃん。起きて！ 起きてえっ！」

覚醒したその時、夢とまったく同じ光景があつた。

「うわああつ！ な、なに……っ」

悠二はベッドの上で飛び退いた。心臓はバクバクと鼓動を奏で、頭は状況が飲み込めず混乱をきたしている。ただ自分の部屋に白衣を着た彩乃がいて、睡眠不足を如実に物語つた眼の下の隈と、反するように異様に煌めく大きな瞳には直ぐに気付いた。

「ど、どうしたの、朝っぱらから……」

思考が回転し始めた少年は、なにげに朝立ちの股間を隠すようにしながら、興奮ぎみの義姉を見詰めた。うきうきと踊りだしそうに軽やかな足取りに、手には何やら薬の瓶を持っている。

「ついにできたのよ！ 長年の研究の成果、全世界の乙女の夢、神の御業ともいえるノーベル賞確実の大発明!!」

「どうやら昨日の夜からずっと研究に没頭していたようだ。」

「で、何ができたって……?」

「寝癖の頭をボリボリ掻きながら少年は一つ大きく欠伸をした。」

「これよ、これこれ！ これこそ、なんと、若返りの薬なのです！」

「……へえ……」

義姉の高テンションを他所に、悠二はもう一眠りしたい気分だった。引越しの前後数日は、学園にも休むと事前に伝えてあったし、いらぬ妄想にかき立てられた昨晚はなかなか寝付けなかったということもある。

「ちよつと、信じてないでしょ。いいわ、今からこれ、飲むから。その絶大な効果に、悠ちゃん、腰抜かすから。えい！」

喉を鳴らしての一気飲みの姿は、昨日のビールとさして変わりはない。この時の少年は、どうせヒアルロン酸などの潤い効果程度のものだと思っていた。そんなものに頼らなくて

つて、義姉は充分若々しいのに。

「おやすみ、義姉さん」

というわけで、毛布を被って横たわる。再び心地良い春眠に捕らわれそうになったその時だった。

ボン！ と何か小さく爆発したような音が聞こえた。

「な、なんだ!？」

慌てて起き上がると、既に部屋の中には薄いピンクの煙が充満し、それはとても甘ったるい匂いがして、数十センチ先の視界も遮られている。ゴホゴホと咳き込んで、手探りで窓を全開にした。

「うええ、こ、これなに？ 酷いよ義姉さん」

振り返った部屋の中から徐々にピンクの霧が晴れていく。

（あれ？）

なのにそこには一向に少年の知る背の高い女性の姿は浮かび上がらず、眼を凝らして視線を右へ左へ。更に霧が薄まって、視界の下方に微かに蠢くものが入り込んだ。

「義姉さん！」

まさか、あの変な薬のせいで倒れて！ その時、彼女と視線が合った。

「あ……れ……?？」

大きな漆黒の瞳が瞬きしている。あどけない表情は困惑に満ちて、愛らしい唇が震えているように見えた。彼女であることは一目瞭然だった。長い艶やかな黒髪は背中まで伸びていて、微かに癖のある横髪の毛先が、剥き出しの殆ど膨らみのない乳房と桜色の愛らしい乳首に掛かっている。とても小さなその肉体を覆う物は何もなく、緩やかな曲線を描く腰部に、奥に切れ込んだ股間のワレメは、女の子であることを確実に証明していた。

「こ、こつち見るなあっ！」

真つ赤になつた少女は、まだ膨らんでいない胸元と産毛すらなさそうな股間を両手でさつと隠した。もう眼を合わせられなくなったように顔を背け、ただその幼い横顔は義姉さんによく似ているように思え、まがう方ない美少女だった。

「ん、もう、悠ちゃんつたら、そんなに見られたら、恥ずかしいぞ」

別の場所から発せられた声。視線を送った先には、目の前の少女と瓜二つな存在があった。

「へ……っ？」

まだだ。

「いやん。いきなり、露出プレイなんてえ」

「あーあ、どうすんだよ、この状況？」

一、二、三、四……四人いた。全裸の幼女が四人いる。皆同じ顔、同じ体格、反応だけはバラバラだった。夢に違いないと思った。毛布を頭から被って眠り込もうとしたのは言

「ふふ、いっぱい、見てたでしょ」

カッと顔が熱くなつて、少女にマウントポジションで押さえられたまま、顔だけを背けた。「み、見てないよ」

捲れ上がったフリルスカートが悠二の胸の上で広がっている。薄いシャツ越しに、剥き出しの少女の股間の感触があつて、そこだけが異常に熱を帯びているような気がした。

「嘘つき。興奮して、オチンチン大きくしてたくせに。こんな風に誘惑されるの、夢見ていたんでしょ？」

「ば、馬鹿じゃないか！ そんなこと、思うわけ……」
ムスッとイチコが唇を尖らせる。

「ん、もう、素直にならないと、あのこと皆に言うよ」

「な、何だよ、あのことって？」

「私の、大人の彩乃のショーツの匂い、悠ちゃん嗅いでいたよね。見ちゃったんだ」

罪悪感が抉られ、背けていた顔を戻す。小悪魔の企てるような笑みが緊張感を高めさせた。冷汗がどつと流れた。

「あ、あれは、ち、散らばっていた、から……片付け、しよう……」

見苦しい言い訳だと自分でも分かる。情けなく泣き出しそうになった少年の顔を義姉の分体は母性を滲ませるほど優しく見詰めていた。

「大丈夫。責めているわけじゃないよ。ねえ、悠ちゃん、あんな布切れに染み込んだものよりも、直に嗅いでみたいと思わない？」

組み敷いた者の返事を待たず、イチコはその幼い体を四つん這いにして、お尻を向けてきた。しなやかな両手でフリルスカートを腰まで捲り上げ、下腹部の白い艶肌が露出する。形良く肉付いた臀部の曲線は既にちゃんと女性で、少年の胸の上で甘えるように振られていった。

「ゆ、悠ちゃんに、見られてる、って思うだけで、ハあ、あそこがジンジンしちゃう。こんなことして、ん、はあ、私だって、は、恥ずかしいんだよ」

くすんだ桃色の小さな肛門がヒクついて、高ぶりを示している。

「う、うん……」

先程よりも眼前にある剥き出しの女の子の生殖器。微かな盛り上がりつつあるの土手が眩しいほどに美しく思え、奥へと切れ込んだ縦ワレから僅かにピンクの秘粘膜が覗いている。ほんのりとそこから、もう充分に牝であることを主張するように匂いたち、欲望を絡めて誘ってくれた。

「ほ、本当に、いいの？」

聞きながら上体を起こしていた。汗ばんだ掌で、木目細かな尻肌を掴み撫でて、その張り柔らかさを堪能してしまう。鼻先はピンクの牝肉へと近付いていて、ワレメに興奮し

た息をぶつけていた。

「あふ、あはああ、いいよ。悠ちゃんなら、触つても、舐めてもいいよ。はうあ……っ」
両手の親指で無毛丘をなぞりながら、グイッと横に割り開いた。ぐちよ、と湿った摩擦音が聞こえたようで、奥は理性をかなぐり捨てさせる強烈な刺激物だった。

「こ、これが、女の子の、オ、オマ○コ……」

濃厚な甘酸っぱい匂いが鼻腔を満たしてくる。縦スジの中にあつたもう一つのピンクの縦スジ。発達途上の薄い粘膜肉は、それでもしつとりと濡れた光沢色で、そこがジメジメした陰部であることを教えてくれる。真っ白な内股がほんのり汗を帯びていて、開かせられながらもまだ生暖かな湿気が籠っている。裂端の小さな突起は、まるで自分で予め捲り上げていたように、微かな芽を覗かせていた。

「うはあ、久しぶりにエッチなことされるから、も、もう感じてきちゃう」

ギラついた視線で幼裂を焦がしていた。鼻からいっぱいに淫気を吸い込んで、興味と欲求のまま突き動かされる。嗅ぎたい。触れたい。舐め尽くしたい。

幼裂のワレメに潜む魔力にとりつかれたようになって、ちゅぷ、と唇で小さな花卉を挟み込んだ。

「あはあ……っ、はあああんっ！」

ビクビクっ、と愛らしいお尻が跳ね震え、じとっ、と滑る蜜が少年の口元に滴り、濡ら

していく。ぬるぬるとした愛液が口裂から染み入り、舐め手の方が唇を愛撫されている気分になってきた。

（うわあ、こ、こんなにちっちゃくても、はあ、はあ、エッチなお汁で、こんな、濡れちやうんだ）

唇で柔らかな媚肉の感触を確かめて、舌先を伸ばしてみる。

くちゅ、ちゅる、ぢゅる……。あれほど喉の渴きを感じていたのに、唾液が溢れてきてぐしよぐしよに秘裂を汚してしまう。

同時に蕩けさられたイチコの唇が自然に開いて、濃厚な甘い吐息で周りの空気を温めているようだった。

「あふつ、あはあ、はあ、そんな、ペロペロされたらあ、いや、はあん。前より感じやすくなつちやつてるううう！」

こんな小さな体のどこでこんなに作られているのか。じゅぷじゅぷ、淫蜜が舌先をのたうたせるたびに溢れてくる。甘い牝蜜に唾液が混ざって、秘め事の淫猥な香が広がっている。感じすぎてしまうのか、ゆつたりと振られだした腰に合わせて顔を移動させ、一秒たりともそこから唇を離したくなかった。

ぬちゅ、ちゅぱちゅぱ、れる……。

「うはあああん、ちよ、ちよつと待ってえ……つ、はあ、はあ、ゆ、悠ちゃんも、気持ち

よく、はあはあ、してあげるからあ……」

僅かに全体を移動させたイチコは、発情を如実に表した頬を桜色に染めた顔で、妖艶な笑みを浮かべた。パンパンに膨らみきった少年の股間を潤んだ瞳で見詰めると、ズボンのベルトを外しにかかる。

「な、な、何して……」

期待していることをしてくれるのだと本当は分かっていた。気恥ずかしさが先にたち、でも拒んだりすることなんてできるはずもなく、少年はされるがまま身を任せた。

「ふふつ、悠ちゃんのオチンチン、はあ、ど、どんなのかなあ……」

手馴れたような素早い動きで、チャックが降ろされ、ボクサーパンツも一気にずらされる。「うはああ、お、大きい……。こ、こんなに大人になってたのねえ……。っ」

解放された途端に外気と熱い視線を感じて、今にも爆発しそうな強張りがピクピク揺れてしまう。帰宅してから刺激を受け続けた逸物は、先端から既に先走った淫水を漏らして、ねつとりと腹部に垂れ落ちていく。この季節にも汗ばむ陽気の今日にいたっては、プンと濃い男の恥臭を放っているに違いなかった。

「イ、イチコ、そんなに、顔、近付けたら……」

「うふ……。悠ちゃん、恥ずかしいの？ 誇っていいんだよ。うはあ、こ、こんなにカリ高くて、エッチな形したオチンチン、おねえさん、初めてなんだからん」

長い紫の髪を掻き揚げるようにして、少女はうっとり瞳を細めて小さな舌を伸ばす。赤い舌尖から唾液が滴るように溢れていて、それは肉茎の筋に当たった。

「は、ああ、こ、こんなことしちゃ、ね……イチコ……」

あどけなすぎ顔から赤いペロをいっばいに伸ばす姿が背徳感を高める。もちろんと優しく生暖かく刺激され、ピクンピクンと肉棒が跳ねた。

「ふあ、ああ、悠ちゃんの……熱い……」

幼女のような掌が強張りをそっと包み込む。可愛らしい手のせいで、少年の逸物はいつもよりも大きく見えた。優しい指圧を感じてググツと膨張を増した気がした。

（ああ、イチコの……義姉さんの、舌が、手が、お、俺のあれを舐めて、触って……）

いとおしいものを見詰めるようにして、義姉の分身はそのプニプニした頬で肉棒を擦りつける。先走りが一層滲み出て、赤ん坊のようなデリケートな指と頬肌をぬちぬち汚してしまう。

「くっ、うああ、そんな、されたら、お、俺……」

「も、もう少し、はあ、我慢して……。まだまだ気持ちよく、させて、うはあ、あげられるから……」

あどけない顔を少し上げて、イチコは再び赤い舌尖を伸ばす。ちろちろと鈴口を刺激され、唾液と淫水が交わり、舌が絡め取っていくのが見えた。

ない。でも、やっぱり……好きなんだもん。愛されたいんだもん。う、うう……」
凍えるように自らの肩をシイナはギュッと抱きしめた。

「それで、こんなこと……」

少女は俯きかげんのまま小さく頷く。

「イチコが、一晚私がシイナになるから、貴女がイチコになりなさい、つて……」
今の彼女からは、自分の知っている大人の義姉の雰囲気は微塵も感じられなかった。か
弱い小さな女の子。

何時の間にか優しい顔になって、彼女の頭を撫でていた。

「シイナのこと……俺も、その、す、好きだよ」

こちらを一切見ぬまま、小さな体がピクンと動いた。

「し、知ってるもん、そんな……こと……」

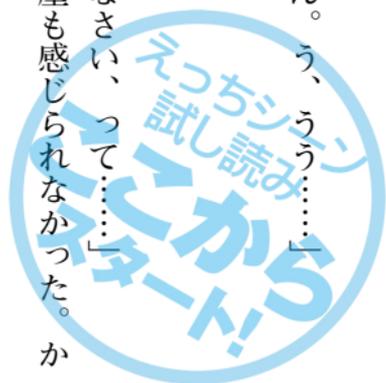
俯いたままの顔が真っ赤に染まっていく。

「だから、ちゃんとシイナとして愛したい」

「えっ！」

驚いたようにようやく顔を上げてくれた少女を少年はお姫様だつこで抱え上げる。涙に
潤んだままの瞳を数回瞬きさせる間に、そつとベッドに寝かせてあげた。

落ち着いてきたせいとか、急に恥ずかしくなったのか、シイナはぷいっと横を向いた。そ



れを微笑ましく見ながら、少年はパジャマを脱ぎ始める。チラチラとその様子に視線を送りながら、じっと待つ少女。下着を脱いで、膨張していく肉棒が現れると、両脚がモゾモゾと擦りあわされていた。

小さな体に覆いかぶさるようにする。

「きゃ……っ」

か細い両手首を握り締めると、自然に可憐な顔がこちらを向いて、潤みきつた瞳が飛び込んでくる。視線を僅かに下げると、微かに光沢した柔らかかそうな唇があつて、じっと見詰めたがら思う。これが欲しい。我がままに汚して、俺のものにしたい。

ちゅぷ……。唇を重ねると、押し返す柔らかさが広がった。大きな瞳が細められ、虹彩が震えているように見える。優しく啄ばみ、強く圧して、いやらしい愛撫のように細かく蠢かせた。雑誌とかで読んだテクニクとか関係ない。したいようにする。

「ん……っ、あふ、ちゅぷ、あ……」

甘い吐息が直接口内に入り込む。悠二の体の下で、少女の体が悶えるようにならぬ動き、甘え求めるように啄ばみ返してきた。可愛くて美味しい、夢見た唇。濃厚なキスに興奮した息遣いが当たりだし、犯すようにしたくなってしまう。

くちゅ、ちゅば、ぬちゅちゅ、ぬるりと舌を歯間に潜り込ませていた。

「うふあ、んっ、んうん……あふうう……」

ゾクつと震えながら、絡みつかせるように赤い舌先が伸びてくる。ねつとりと唾液が混ざりあい、夢遊してように逆上させて、舌と舌をぬちよぬちよと擦り合わせた。

「こんら、ひやらしい、はあはあ、よお……」

少女の口内を舌で全て蹂躪したい。口蓋をなぞりつけ、舌裏を弄り、入れ返してくるべ口を唇で柔らかく挟み込む。くちよくちよ唾液で互いの口元を汚し、淫らな行為をしているのだと確認しあっているようだった。

一旦唇だけを離しても、伸ばした舌先だけは絡ませたままだ。お互いの発情した瞳を見詰めあい、その合間でベロとベロがぬちちよりと弄りあう。

「あはああ、はあはあ、キスだけで、頭が馬鹿になっちゃうう……っ」

長い口淫を終えたその時には、シイナの頬は桜色に染まって、確かな艶に満ちていた。

「この体を全部、俺のものにしたい……」

コクリ小さく頷いた少女の仰向けの体をつい舐め回すように見詰めてしまう。極めて薄い生地のネグリジェから、愛らしい乳首が透けて見えた。峰のない乳房部を広げた掌で撫でるようにすると、ビクツと震えて充分すぎる性感帯であると教えてくれる。

「や、あん……っ、嘘、こんな、敏感になつて……あつ、あふう！」

薄生地越しに、ちゅばちゅば、ツンと硬くなつて突き出した乳首を舐め回す。彼女の両手に力が入ったのが分かり、顔を上げて腰が泳ぐ。

「あううつ、乳首、こんなに感じて、やはあああ、気持ち、いいよおつ！」

ぷっくり突起尽くした乳首を舌で転がし弄ぶ。乳悦に蕩けていくような息遣いを夜闇に響かせ、甘い少女の肌の香がうっとりさせるほど鼻腔に入り込んだ。唾液で濡らし、更に透けた生地から完全に乳首が見えてしまう。甘噛みするように歯を立てると、

「あ、あああん、そんな風に、されたらあああ！」

お腹に敷いた少女の股間がビクンと跳ねてぶつかってくる。

左から右の乳首に唇を移動させ、分け隔てなく責め立ててあげる。ちよつと痛くしてあげた方が、シイナの反応は大きく、漏らす喘ぎも熱籠っていた。ひよつとしたら、そう思った時には、右の乳首を唇で吸いながら、手首から離れた指先で左の発情突起をきつく摘みあげていた。

「あひついいい！ ダメ、ダメえええ！ 乳首虐められたら、やはあああん、考えられなくなるううう！」

緩急をつけるように摘む力の入れ方に差をつけていく。反応を抑えようと呼吸を無理に整えようとするシイナ。

「はあ、はあ、はあ、んっ……はあ……くっ、はあ……」

乳首から唇を離して、顔を覗きこんであげる。少し汗ばんで、微熱に侵されたような赤い顔が、ちよつとだけ恨めしそうに見詰めてきた。

「シイナも、フタコと一緒になんだ……」

意味を理解してか、ぷいっと横を向いてしまう。何も言わないのはそうだという証拠だ。でも理由はそれだけではなかったようだ。彼女の頭上になった枕を不意に投げつけてきた。

「いてっ！」

「エッチしてる時に、他の子のこと言うな！ 馬鹿！」

そう言つて、左肩を下にして膝を抱えるように丸まってしまった。完全に防御の姿勢に入つてしまった少女を見下ろしながら、少年は頭を抱えるしかない。更に視線を下げると、自分の勃起した逸物が見えて滑稽だった。

（ど、どうすりゃいいんだよ？）

自業自得とはいえ、こんなじゃ朝まで眠れない。出ても行かない少女の態度は、デリカシーのない一言に対する彼女なりの罰で、手を出させないまま悶々と過ごさせるためのものか。

がつくり肩を落としたその時、ポンと何かが頭に当たった。丸められた紙。そつと扉が閉じられるのが見えた。

（これって……いつ！）

誰かから投げ込まれたそれには、「レイプ願望あり。無理やり犯せ！」と書いてあったのだ。（そ、そんな、無理やり、だなんて……）

小さく丸まったようになっていいるシイナを見る。透けるネグリジェから微かに汗ばんだ白い柔肌が見え、緩やかな曲線の腰部が充分に男を刺激してくる。薄生地越しのショーツは勝負パンツだったのか、フロント部分だけをギリギリ隠した小さな物で、バックはお尻の谷間に食い込むように潜り込んでいる。

「よ、よし……っ！」

突き動かしてくる衝動を利用して、少年は頑なな少女のネグリジェの裾をはだけて、下から腰に手を伸ばした。

「ちよ……っ、や、やだあつ！ もうエッチしないってば！ きゃ、きゃあつ」

「うるさい！ こんないやらしい格好をしているシイナが悪いんだ」

思いのほか抵抗なく、下着を一気にズリ下ろし、自分でも驚くほどスムーズにショーツを脱がせきつた。それはムンと牝臭を立ち昇らせて、生々しい熱に包まれ、そして秘部を覆う中心は、ねっとりとした淫蜜に濡れていた。

「やだっ！ 返してよ！」

下着を握り締めた手を大きく上げると、黒髪の少女は抱きつくようにしてそこに手を伸ばす。彼女の股間が少年の太股を挟み込み、ぐしよ、と湿った感触が走った。

「や、あん……っ」

暖かい少女の体をその瞬間に抱きしめると、抵抗は殆どなくなった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>